

〈大会記念講演〉

ポリスの世界

——スパルタの場合を中心にして——

昨年一年間、私が外国で過ごした間に、日本ではいろいろなことがありましたが、その中で大きな出来事の一つは、やはり天皇が代わったことだと思えます。今年の一月九日には新天皇の朝見の儀というのがありまして、その時のお言葉の中に「皆さんとともに日本国憲法を守り、これに従って責務を果たすことを誓い、云々」という個所がありました。私がこれを読んで思い浮かべたのは、古代のスパルタのことです。

古代のスパルタでは、毎月、王とエフォロイ（毎年五人選ばれるスパルタの最高役人）が誓いを交わしたという伝えがあります。スパルタでは、紀元前八〇〇年ごろにポリスが成立してから、王が二人立っており——二つの王家から、いつも二人の王が立っている状態は紀元前三世紀まで続くわけですが——その王とエフォロイとの間で毎月誓いが交わされた。それは、まず王が「私は現行の法に従って王としての務めを果たす」と誓い、次いでエフォロイが「あなたがその誓いを守るならば、我々は王の地位を揺るぎないものとして守る」と誓うものでした。

清 永 昭 次

これを伝えていく史料は「王は王のために誓う。エフォロイはポリスのために誓う」と説明しています。ですからこの誓いは、いわば王とポリスの間の誓いと言い換えることができますが、最初に王が法を守ると誓い、その次にポリスは、王が法を守る限りににおいて我々もその王の地位を守る、と誓うわけでした、これは、王とポリスの上下関係、王よりもポリスの方が力において、権力において上位であることを示しているように思います。

ポリスの構成員は市民（ポリタイ）でしたから、この王とポリスの誓いというのは、もう一つ言い換えると、王と市民の間の誓いと言えるわけで、王よりも市民、あるいは市民団の方が上位であるという意味になると思います。もちろんスパルタに限らず、ギリシアのポリスの市民は貴族と平民から成っていました。スパルタの場合ですと、紀元前六世紀の半ば近くから、市民は貴族・平民を問わず、「同等者（ホモイオイ）」と呼ばれるようになりました。これは、スパルタの市民はすべてスパルタの法の前に同等であるという意味で、法的にも、あるいは政治権力の点でも、紀元前六世紀の半ばご

るにはスパルタ市民の貴族と平民には間の差がなくなった。しかも、その市民団は王よりも権力の点で上に立っているのです、この紀元前六世紀の半ばごろから、スパルタは民主政の時期に入ったと言っていると思います。

アテネなどに比べると、スパルタはもっと早くに民主政が実現したと、私は考えておりますが、一般にはスパルタとアテネが比較されて、アテネは民主政のポリスで、スパルタは寡頭政のポリスであると言われております。なぜスパルタが寡頭政であるかと言えば、スパルタの市民というのはスパルタの全住民のうちのごく一握りに過ぎないのであって、スパルタには市民の他に、ペリオイコイとかヘイロータイとか呼ばれて、市民に支配されている人々がたくさんいた。それで実際に支配に与かることができたのは、ごく少数の市民にすぎなかったから寡頭政である、とこういう説明であります。

しかし、ギリシア史で貴族政とか民主政とか寡頭政とか、いわゆる国制(ポリテイア)の形態について論ずる場合には、市民団の中の権力の分配を考えるので、ペリオイコイとかヘイロータイという、市民団の中にいない要素を含めて寡頭政であるとか民主政であるとか言うのは、もともと議論の立て方がおかしいわけです。市民のただで考えれば、紀元前六世紀の半ばごろから、スパルタの市民の間には貴族・平民の差はなく、すべて平等の政治的な権利を持つようになつた、つまり民主政になつたと言うことができます。

今日は主にスパルタの話をいたしますが、私が前提したいと思っているのは、スパルタはギリシアのポリスの中で、一種独特な、特殊なタイプのポリスではなく、本質的にはアテネなどと変わりのな

いポリスであるということです。少なくとも国制の問題を考える場合には、スパルタは決して特殊なポリスではありませんでした。

ところで民主政ということですが、もちろん民主政になつてから、名門の家柄の家と、平民の家とあって、ポリスの政治や軍事のリーダーシップを握った人の多くは名門の出であつたと考えていいと思います。つまり、民主政になつたといつても、そこにはおのずから積極的に政治に参与した名門の出を主体とする有力者の要素と、そうでないその他大衆というのがいたに違いありません。しかし、民主政というのは、最終的には民会において決定される市民団の意思がポリスの意思となつていくシステムでして、これはアテネの民主政などの場合にもよく分かることです。一例をあげますと、アテネのペリクレスについてのツキディデスの有名な言葉がありまして「言葉の上では民主政だつたけれども、実態を言えば、第一人者の支配であつた」と述べております。つまり、実際のところは独裁政治みたいなものだつたと言っているわけです。実際ペリクレスの政治行動を見てみると、非常に独裁的に振る舞っていた節が少なくなかったのですが、そのペリクレスが紀元前四三〇年——ちょうどペロポネソス戦争がはじまつた次の年の話ですが——アテネに疫病がはやって、市民がばたばた倒れていった。そういう状況の中で市民の怒りがペリクレスに向けられた。それでペリクレスは民会に赴いて説得に努めたのですが、結局、民会では彼を將軍職から退け、かつ罰金刑を課したということを、ツキディデスは伝えております。つまり、ペリクレスはあたかも独裁者のように振る舞っていたのですが、いざとなると市民団は民会で彼を免職させることができたわ

けで、やはり根本においては市民全体がアテネというボリスの主権を握っていたと言えるのだと思います。

そういう民主主義、民主政が行われるためには、しかも単に名門の者たちが政治をリードするのではなく、大事な節々では市民全体の意思が貫徹する仕組みが行われるためには、それなりの経済的な裏付け、つまり、大多数の市民が、一握りの有力者に対して独立の立場を主張できるだけの経済力を持っていることが必要で、スパルタの場合ですと、その市民の経済的な力の一つの表われは、「共同食事」という独特の制度にありました。スパルタの市民は、毎晩の食事は家庭ではとらず、だいたい十五人位がグループになりまして、それぞれのグループ毎に集まって食事をとりました。その夕食は、自分の土地、つまりクレイロスからの生産物をそれぞれ持ち寄って行われたのですが、その食料を持ち寄ることができずに「共同食事」に出られなくなると、その人は市民団の外に排除される、つまり市民権を失ってしまいました。逆に、クレイロス所有市民は、そのクレイロスをヘイロータイに耕作させることによって、「共同食事」に出席することはもちろん、家族の生活を支えることもボリスの政治や軍事に参加することもできたのであります。

もちろんスパルタに限らず、どのボリスでも市民の多くはクレイロス所有市民でしたが、アテネの場合で言えば、ペロポネソス戦争が終わった翌年、紀元前四〇三年にフォルミシオスという人が、土地を持っていない市民は市民団から排除しようという提案をいたしました。その提案は否決されましたが、この出来事を伝えている史料は、もし提案が可決されたならば、およそ五千人の市民が市民権

を失ったであろうと述べています。当時のアテネの市民の数は正確には分かりませんが、おそらく二―三万人の間だったろうと考えられ、かりに二万五千人とすると、市民の約五分の四がクレイロス所有市民であったことになります。もちろん、この中には生活の苦しい零細な農民もある程度――例えば二―三千人ぐらいいただろうと思いますが、残りは、自分のクレイロスからの生産で一家を支えることのできる農民でした。また、土地を持たなかった五千人の市民のほとんどは商工業者だったわけですが、その過半数は商工業活動によって家族の生活を支えることができたと考えてよいと思います。つまり、紀元前五世紀の末ごろのアテネでは、市民の大多数が経済的に自活の可能な生活を営んでいて、それが、アテネの民主政の運営を単なる建て前に終らせないための裏付けになっていたのであります。

しかしスパルタの場合は、同じ紀元前五世紀の末までで考えれば、経済的に自活の可能な市民の割合はもっと多く、ほとんどすべての市民がそうだったと思われます。スパルタというボリスは、ドーリス人がラコニア地方のスパルタの地域に入ってから三〇〇年ぐらいの時を経た、紀元前八〇〇年ごろに成立しました。そして、ドーリス人が入ってきた時に、それまでアカイア人が持っていた土地を接收してクレイロスに分配しました。その後、紀元前七世紀の前半に一時土地を失う市民が増えましたが、そのとき土地の再分配が実施されて、スパルタ市民は、貴族はもちろん平民も、ほぼ残りなくクレイロス所有者、しかも「共同食事」に出席できるだけの経済的な力を持つ者となった。そういう経済的な裏付けがあって、スパルタ

の民主政というものが紀元前六世紀の半ばごろに成立した。ですから、その民主政は、アテネの場合と同様に、あるいはそれ以上に、ただの名目ではなくて、きっちりと実態を伴った民主政であったと思います。

スパルタはその後、リュクルゴス制度という、すでに少しずつ導入していた独特の制度を整備して、クレイロス所有市民が経済的に没落しないように努めました。いわゆるスパルタ教育であるとか、「共同食事」もそのひとつですが、夫であり父親である人が毎晩よそで食事をするという制度を、当時のスパルタ人が、また家に残された家族がどのように感じていたかということは、全く分かりませんが、今日の感覚で言えば、ノーマルではない。スパルタ教育というものも、とても今日の青少年には耐えきれないような教育でしたし、貴金屬貨幣を使わせないと、土地の売買譲渡を許さないと、一言でいうと、やはり、いろいろ市民に無理を強いていたように思います。しかしスパルタ人にとっては、民主政を維持するために、クレイロス所有市民としての経済的地位から一人も脱落しないということが不可欠でして、そのような無理も我慢したのだと思います。ところがペロポネソス戦争で勝利をおさめてギリシアの覇者となつた結果、スパルタは、貨幣経済の行われていた外の世界と交際せざるをえなくなり、貴金屬貨幣の使用を厳しく取り締まっていたリュクルゴス制度は、その面から崩れてまいりました。紀元前四世紀の前半には、今まで禁止されていた、土地の贈与、遺贈あるいは譲渡が許されたのですが、ひとたび許されると、堰が切れたように、一気に土地の移動が起こった。そして、一方では大土地所有が進み、

他方ではクレイロスを喪失する多数の市民が現れ、スパルタの民主政はその経済的な支えを失うという状態になったわけであります。もちろん、スパルタは、その後も、ローマがギリシアを征服するころ、いや、その後のローマ帝政期まで存続するのですが、紀元前四世紀以後、ポリスとしては有名無実化していく。中産的なクレイロス所有市民層が急速に没落し、民主政が解体して、ポリスの実態を失ってしまうわけであります。

そういうクレイロス所有市民の没落、中小土地所有者の没落というものは、より緩やかな形においてではありましたが、紀元前四世紀以降のアテネでも同様でして、それで紀元前四世紀のアテネはポリスとして変質過程に入ったと言われるわけです。しかし、スパルタやアテネ以外のポリスも、多かれ少なかれ同じような方向をたどつたと思います。ポリスというものは、クレイロス所有市民、中小土地所有者が広範に存在している間は健在であり、民主政も順調に運営されますが、クレイロス所有市民の没落が始まると、民主政の解体あるいは形骸化が生じ、ポリスの変質・衰退もたらされた。つまり、ポリスは経済的に自活可能のクレイロス所有市民に基礎を置いていたということ、これがポリスというものの根本的な特徴であつたと言えると思います。もちろん、経済的に自活することのできる市民は農民に限らなかつたわけで、スパルタでは市民が商工業活動に従事することは禁じられていましたが、他のポリスでは商工業を営んで家族の生活を支える市民もいました。とくに、アテネのようなポリスでは商工業者の活動も、かなりの程度まで進んだのですが、先程申しましたように、そのアテネにおいてさえも経済

の中心は農業にありました。ですから、経済的に自活可能のクレーロス所有市民がポリスの基礎であり、彼らが健在である限り、ポリスも健在だったと総括することが許されるのであります。話は飛びますが、この総括によって戦後の日本を観察してみますと、今日の日本の政治的な安定は、国民の大多数が中流の生活を営んでいる、あるいはそう思っていることによるところが大きいということが理解されるように思います。そして、ポリスの場合には、その中流の生活を営むクレーロス所有市民が没落過程に入ったときに、ポリスもその生命を失っていったのであります。

以上、「ポリスの世界」という題で、ポリスの根本的な性格と考えておりますところをご披露させていただきました。すでに申しましたように、スパルタというポリスは、決して特殊な、例外的なものではなく、本質的に言えば、ギリシアの他のポリスと共通のポリスでありました。ですから、本日はスパルタを中心にしてお話ししましたが、基本的には、スパルタ以外のポリスにも当てはまることとして申し上げた次第であります。あと残りの時間を使って、去年写してまいりましたスパルタ関係のスライドを皆さんにご覧に入れたと思います。(この後スライドが上映された)

〔付記〕これは、去る一九八九年五月十四日に行われた、学習院大学史学会大会に於いてお願いした講演を、編集委員会できとめ、再度清水先生に加筆訂正していただいたものである。